〔第11回学術集会公開シンポジウム：家族看護研究のストラテジー〕

家族看護研究における質的研究の視座

高知女子大学看護学部
池添　志乃

家族の多様化，複雑化が指摘される現在，家族看護において家族固有の体験や価値観，信念などをよりよく理解し，看護ケアに生かしていくことが重要となっている．家族の主観的な体験や価値観を理解し，新たな知識を創造することを可能にするものが質的研究である．

実践の場で起こる様々な家族現象のなかには，それらを理解するための適切な枠組みや理論が見つからないことも多い．質的研究を積み重ねることで，現象に対する一般的法則や枠組みを見出し，理論化していくことが可能となり，それを基にして根拠をもった実践知の発展，豊かな看護ケアの展開が可能になると考える．

本稿では，筆者が取り組んだ質的研究「脳血管障害をもつ病者の家族の生活の再構築」によって明らかになった「家族の知恵」について紹介し，そして現在取り組んでいるグラウンデッド・セオリー法を用いた質的研究における分析過程に焦点をあて述べていく．

1.「脳血管障害をもつ病者の家族の生活の再構築における家族の知恵」

本研究は，脳血管障害をもつ病者の家族が病気と向き合いながら，どのように生活を再構築していっているかを明らかにすることで，家族看護者として家族をどのように援助していくべきかなど，援助指針を提案することを目的として取り組んだ．

1）家族の生活の再構築のモデル

対象者は，病者と同居し，介護している配偶者で，性別は，男性3名，女性9名，年齢は60歳代から70歳代，在宅療養期間は7ケ月から10年であった．

本研究の結果，家族の生活の再構築とは，家族が自らのおかれた状況を吟味しながら，病気やそれに付随して生じる状況の定義を行い，病者を抱えた生活の中で培ってきた経験や知識に根ざした家族の知恵を発展させ，状況を見通し，再構築の行動をとりながら，生活を維持，再建していくプロセスであり，【状況の定義】【家族の知恵】【家族の見通し】【再構築の行動】の4つの局面が含まれることが明らかになった（図1）．

2）家族の知恵

【家族の知恵】とは，病者を抱えた生活の中で培ってきた経験や知識に根ざした，家族独自に備わり，発展し，修練されていく技であり，〔介護のマネジメントに関わる家族の知恵〕，〔状況の構えをもつことに関わる家族の知恵〕，〔継続性を保つことに関わる家族の知恵〕，〔関係性を深化させていくことに関わる家族の知恵〕の4つのカテゴリーが明らかになった（表1）．

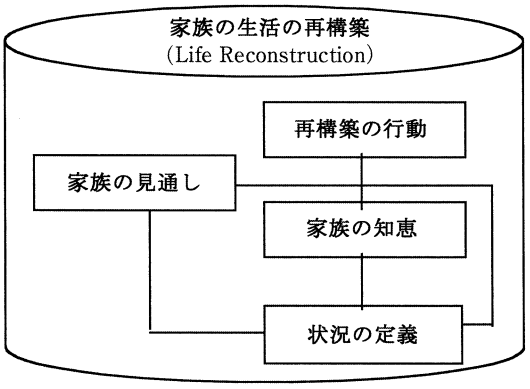

図1．家族の生活の再構築のモデル

表1．家族の知恵

カテゴリー	サブカテゴリー
介護のマネジメントに関わる家族の知恵	〈コツをつかむ〉〈援助の幅を広げる〉〈人とのつながりを保つ〉
状況の構えをもつことに関わる家族の知恵	〈気長な構えをもつ〉〈覚悟を決める〉〈辛抱する〉〈状況を楽観的に捉える〉
継続性を保つことに関わる家族の知恵	〈その人らしさを認める〉〈これまでの生活を守る〉〈介護と自分の生活の両立を図る〉
関係性を深化させていくことに関わる家族の知恵	〈関係性の確信をもつ〉〈病者に合わせていく〉〈夫婦で合意する〉〈病者との新たな関係性を築く〉

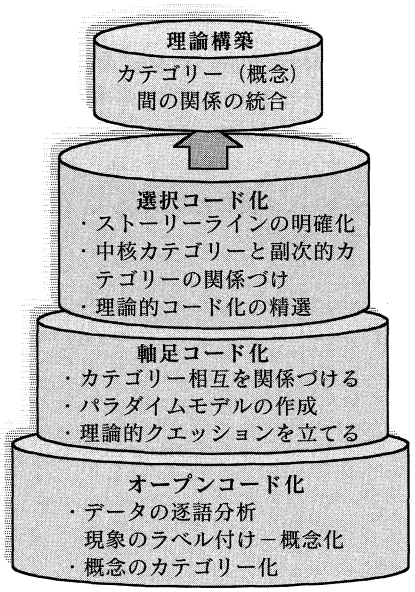

図2．グラウンデッド・セオリー法を用いた分析過程

2．グラウンデッド・セオリー法を用いた分析過程

現在，生活の再構築がうまくできている家族とできていない家族とでは，どのような違いがみられるのかを明らかにするなどの研究目標をもって「家族の生活の再構築」の理論的モデルの構築を目指して，研究を継続している．

データ分析は，グラウンデッド・セオリー法の分析手順としてデータを丁寧に分析し，概念を見出し，カテゴリー化し，概念間の関係を統合して理論を創っていくという手順を踏んでいっている（図2）．

1）オープンコード化

逐語分析を行いながら，現象のラベル付け，データの概念化を行い，下位概念を見出していくプロセスである[1]．データを丁寧になぞり，データの一言，一言に緻密なコーディングを行い，産出された概念についてカテゴリー化，ラベル付けを行う．ラベル付けは，データの言葉を大事にしながら，抽象度を高めすぎないようにしている．又，概念のどのようなものかを説明する特性（Property）や多様性の範囲を示す次元（Dimension）[2]を検討しておくようにする．

2）軸足コード化

オープンコード化のあとで，諸カテゴリー相互を関係づけることによって，データをまとめなおしていく．ここでは，まずデータの全体像を把握し，データを特徴的に表す現象の抽出を行い，パラダイムモデルを作成する．パラダイムモデルとは，抽出した現象をその条件となる別の現象やその後の結果との関係の中で捉えようとするものであり，再度データに戻り，現象に関連した概念の抽出，カテゴリー化し，現象の記述，図式化を行う．

さらに現象について，例えば，「～である家族は，うまく生活の再構築ができていけるのではないか？」等，理論的クエッションとしての問いを立てておく．理論的クエッションが今後の継続比較分析の視点となる．

3）選択コード化

中核となるカテゴリーを選び，他の副次的カテゴリーと体系的に関係づけ，それらの関係が妥当なものかを確認し，各々のカテゴリーを統合させていく．まず，各々のカテゴリーを関連づけてストーリーラインを描く．ストーリーが語る中心的な現象に対して一つの概念―中核カテゴリーを付与し，その概念に他の副次的なカテゴリーを関連づける．中核カテゴリーの発展，洗練化については，その特性と次元という観点から行う．より豊かな特性と次元が明らか

になることで，より豊かな中核カテゴリー(概念)が導かれる.

3. おわりに

質的研究は,研究を積み重ねていくことで一般化,理論化していくことが可能であり，質的研究の成果がその現象を説明する一つのエビデンスになり，根拠をもった実践知を発展させることが可能となる.さらに，実践の場において個人の印象で終わりがちであった現象の理解を根拠のある実践知としてまとめ，蓄積し，共有化していくことが可能となる.

これらの優位性をもつ質的研究は，様々な経験を積み重ね,共有化しながら歴史を創造し,家族固有の価値観や信念を形成している家族の理解や家族ケアの実践知につながっていくものである.今後,質的研究における家族全体を捉えることの限界や倫理的な課題といった家族看護研究における質的研究の困難さをふまえつつ，さらに家族看護研究において質的研究を蓄積していくことが重要であろう.

参考文献

1) Anselm Strauss & Juliet Corbin：質的研究の基礎―グラウンデッド・セオリーの技法と手順―, 南裕子監訳, 医学書院，東京，第1版第1刷，1999
2) 山本則子, 萱間真美, 太田喜久子, 他：グラウンデッドセオリー法を用いた看護研究のプロセス, 文光堂, 東京, 第1版第2刷，2002